

平成17年11月1日

森林総合研究所は創立百周年を迎えました

- [森林総合研究所百年を迎えて](#)
- [森林総合研究所創立百周年記念事業が行われる](#)
- [森林総合研究所創立百周年記念シンポジウムの開催](#)
- [森林総合研究所創立百周年記念行事の開催](#)
- [森林総合研究所 ミッションステートメントの公表](#)
- [森林総合研究所百年のあゆみ](#)

森林総合研究所百年を迎えて

理事 櫻井 尚武

森林総合研究所が、その前身の農商務省山林局所管の林業試験所として1905（明治38）年に発足してから、今年で百年になりました。この間の経緯を、「百年のあゆみ」にまとめました。また、載せきれない成果を集めた成果集及び残しておきたい出来事を紹介する事項集を別冊にまとめました。これを集に、これまでのことを振り返ってみよう。

1871（明治4）年に岩倉使節団が欧米に出かけました。この頃、初代の所長になる松野はさがドイツに留学していました。使節団への松野の力役により、同行していた大久保利通は、林業の重要さを認識しました。帰国後の1875（明治8）年に大久保は内務省の「本行事業ノ目的ヲ定ムルノ儀」を建白、その中で森林法制確立を提議しています。また、富国強兵を国是とした殖産興業政策を推進して、官営事業の創設や牧畜、農林業などの官営施設の創設などを行い、その重要分野の一つに林業を位置づけました。そして、1878（明治11）年に、森林歴史の教育と内外の樹木の適否試験をするため、東京府北豊島郡荒野川村西ヶ原に樹木試験場が開設されます。1886（明治19）年には、主として林産物に関する事項を行うため、山林局直轄の林業試験場が同所に開設されました。

一方、明治以前にも、荒山や傾斜山地と呼ばれる保護的な森林が管理が行われていましたが、生活圏周辺の山は森林利用で荒れ地が多く、大抵の荒れ地は土砂災害や山地崩壊が多発したといえます。森林で現勢保全を求めた後は、樹れ天竜の水を治めた金原明善を初めとして、各地に多くあります。1879（明治12）年にオランダから招聘された土木技師のヨハネス・デレークは「治水は治山である。護岸工より上流の樹林が大切」と言ったそうです。

大雨災害はその後も頻発したため、1912（明治45）年から、山間地奥地の降水量を知るために39にも及ぶ森林測候所が建設されましたが、災害防止に如何に懸命であったかが窺えます。1897（明治30）年の山林局試験事業に関する山林局長通達を改正した1902（明治35）年の林業試験場規定では、研究事項が（1）土地及び気象、（2）造林及び保護、（3）林木の成長、（4）林産物の性質と利用、（5）造林林業でした。当時の重点は自然が明確になっています。

このような経緯を経て、わが国の運営に必要な組織と位置づけられて、1905（明治38）年に、本研究所が公式に設立されたのです。ところでこの研究の母体は現在でも、それほど大きく変わっていません。ゲノムやIT技術などが導入されましたが、災害防止、産業育成など自ずかとはるばるは変わっています。改めて、設の頃の森林、林業研究に対する意義と期待を思い返し、安全で安心して生活できる生活環境を確固なものとするために、温故知新の思いを込めて、新たな創造と国民への貢献のできる研究推進をしてゆきたいと思います。



森林総合研究所創立百周年記念事業が行われる

独立行政法人森林総合研究所は、明治38年（1905年）に農商務省山林局林業試験所として発足して以来、本年11月1日をもって創立百周年を迎えました。この百年の間に、林政統一（昭和22年）に伴う林業試験機関の合併、筑波研究学園都市への移転（昭和53年）、組織改編に伴う名称変更（昭和63年）、更に独立行政法人への移行（平成13年）などがありました。

近年、地球温暖化と森林との関わり、森林の持つ公益的機能、循環型社会の構築に向けた木質資源の利用など、森林への関心は高まっており、森林に関する総合的研究を行う森林総合研究所の役割は、ますます大きくなっており、今後の国民へのサービス向上に資すべく、以下の記念行事を行い、進めます。

森林総合研究所創立百周年記念シンポジウムの開催

10月19日、イノホール（東京都千代田区）において、記念シンポジウムを開催しました。

大所長理事の開会挨拶に続いて、特別講演では日本大学総合科学研究所教授 佐々木重彦氏から「森林研究者の夢—これからの科学技術の方向性—」、朝日新聞総合研究本部主任研究員 柏原清一氏から「日本の発展ととりもどそう—森林研究の今後を考える—」、京都大学生存圏研究所所長 川井一広氏から「木づかいのススメ」から望む」と題し、各々の視点から所長にむけて求められる森林のあるべき姿、試験研究のあり方などについてご講演いただきました。



講演を行う佐々木重彦氏



開会の挨拶を行う大所長理事

また、当所の若手研究者2名から「森林総研研究者の持つ夢」と題し、それぞれの研究分野から試験研究の将来について夢を紹介しました。続いて、「夢に向かって—研究所のこれから—」と題し、将来の日本及び世界の森林と、そして森林・林業・木材研究のあるべき姿や夢などについて、櫻井理事により来場された方々からの意見等をこぼれにしました。最後には久田理事の挨拶で無事閉会となりました。

地球温暖化と森林との関わり、森林の持つ公益的機能、循環型社会の構築に向けた木質資源の利用など、森林への関心が高まっており、森林・林業・木材産業を研究対象とする当研究所の役割は、ますます重要なものになると考えられます。シンポジウムで語られた“夢”がかなえられるように、これからの研究を推進し、頼まれる研究所、世界をリードできる研究所となるよう心掛けたいと思います。

森林総合研究所創立百周年記念行事の開催

11月1日、2日とわたる創立百周年記念行事を行いました。

11月1日は、虎ノ門/ミナト（東京都港区）において、午後3時より国際日本文化研究センター教授安田直恵氏による記念講演会を行い、午後4時15分からは記念式典にうつり、林野庁、農林水産技術会議、独立行政法人機関、公立試験研究機関、中央林業団体、報道機関等の招待者157名、元職員36名、職員52名の計245名の出席があり、理事長の挨拶、前田副理事長挨拶、農林水産技術会議会長（代託山田事務局長）、日本林業協会（代託澤本会長代行）の来賓祝辞が行われ、国際森林研究機関連合（IUFRO）からお祝いの言葉というべき「サーティファケート」の授与があり、最後に理事長から森林総合研究所の今後の使命として「ミッションステートメント」の公表を行い、滞りなく執り行われました。引き続き、記念パーティーが開かれました。



記念式典会場の様子



本所・支所の土地を代表する樹木を植樹



祝詞会には重々しい雰囲気がありました



前田林野庁長官の挨拶



大勢の参加者が見守る中、記念植樹が行われた会場



百年間の思いとこれからの希望を込めた記念碑

森林総合研究所ミッションステートメントの公表

11月1日に虎ノ門/ミナトで開催した「創立百周年記念式典」において、これまでの百年間の歴史を踏まえ、森林総合研究所役職員の旗印ともいえるべき「ミッションステートメント」の公表を下記のとおりに行いました。（英語版は省略）

ミッション（研究所の存在意義）

森林・林業・木材産業に保つ研究を通して、豊かで多様な森林の恵みを生かした循環型社会の形成に努め、人類の持続可能な発展に寄与します

ビジョン

（ミッションを果たすための研究所のあるべき姿）

日本の未来にとって、なくてはならない先導的研究機関となることを目指します

タスク

（ミッションを実現するための具体的役割）

1. 科学技術の発展に寄与します
2. 行政施策の推進に寄与します
3. 社会活動の活性化に寄与します
4. 国際協力の推進に寄与します

森林総合研究所百年のあゆみ

百周年記念行事にあたり、以下の記念誌を発行しました。

森林総合研究所百年のあゆみ目次

独立行政法人 森林総合研究所「百年のあゆみによせて」
創立100周年によせて
森林総合研究所100周年にあたって

理事長 大熊 幹章
林野庁長官 前田 啓章
(財)日本林業経営者協会副会長 遠水 亨

- 第I章 林業試験場から森林総合研究所へ —100年の沿革—
- 第II章 専門別試験研究の動向
- 第III章 地域に対応した試験研究の動向
- 第IV章 海外研究・国際協力の動向
- 第V章 総合研究の動向と成果
- 第VI章 付図・付表

また、別冊として「森林総合研究所百年の成果集」「森林総合研究所百年の事項」を発行しました。



森林総合研究所百年のあゆみ

（森林総合研究所百年のあゆみ 別冊）
森林総合研究所百年の成果集（森林総合研究所百年のあゆみ 別冊）
森林総合研究所百年の事項